

## 悪い農夫たちのたとえ

ルカ福音書20:9-18 (新改訳2017訳)

- 20:9 また、イエスは人々に対してこのようなたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を造り、それを農夫たちに貸して、長い旅に出た。
- 20:10 収穫の時になったので、彼は農夫たちのところに一人のしもべを遣わした。ぶどう園の収穫の一部を納めさせるためであった。ところが農夫たちは、そのしもべを打ちたたき、何も持たせないで帰らせた。
- 20:11 そこで別のしもべを遣わしたが、彼らはそのしもべも打ちたたき、辱めたうえで、何も持たせないで帰らせた。
- 20:12 彼はさらに三人目のしもべを遣わしたが、彼らはこのしもべにも傷を負わせて追い出した。
- 20:13 ぶどう園の主人は言った。『どうでしょうか。そうだ、私の愛する息子を送ろう。この子なら、きっと敬ってくれるだろう。』
- 20:14 ところが、農夫たちはその息子を見ると、互いに議論して『あれは跡取りだ。あれを殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる』と言った。
- 20:15 そして、彼をぶどう園の外に放り出して、殺してしまった。こうなったら、ぶどう園の主人は彼らをどうするでしょうか。
- 20:16 主人はやって来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。」これを聞いた人たちは、「そんなことが起こってはなりません」と言った。
- 20:17 イエスは彼らを見つめて言われた。「では、『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった』と書いてあるのは、どういうことなのでしょうか。
- 20:18 だれでもこの石の上に落ちれば、粉々に砕かれ、またこの石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」

### 【祈りながら考えよう】

- (1) ぶどう園、その主人、農夫たち、遣わされたしもべたちとは、具体的に誰を指していますか。
- (2) 主人の跡取り息子は誰を指していますか。どのように扱われましたか。
- (3) 18節の「この石(要の石)」から、主イエスの2つの来臨をどう説明出来ますか。

### 【解説】

#### (1) マタイ福音書とマルコ福音書を参照

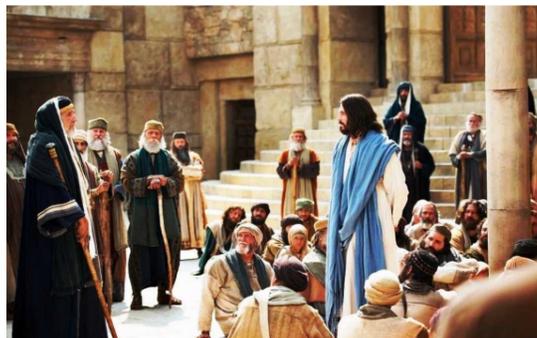
このたとえは、マタイ福音書にもマルコ福音書にもある。マタイは21章33-46節。ルカでは、ただ《ぶどう園を造り》と、なっているが、マタイの方では、《彼はぶどう園を造って垣根を巡らし、その中に踏み場を掘り、見張りやぐらを立て》と、ぶどう園を造ることが具体的に言われている。

マルコ福音書では12章1-12節。ルカよりも詳しい。ルカでは遣わされたしもべたちが3回しか記されていないが、マルコでは遣わされたしもべたちが3回だけではなく、4回も5回も繰り返す、何度もしもべが遣わされた。

しもべたちは、捕らえられて打たれ、侮辱され、なぐり殺されたり、石で打ち殺されたり、さんざんの目にあわされている。これがイエスが語られたたとえの最も近いかたちであろう。

このたとえが語られた場所は、人の子の権威に関わる議論について、祭司長や律法学者、長老たち、すなわちユダヤの最高議会サンヘドリンの議員たちからの質問に対して、イエスが直接には答えなくて、逆に質問して、イエスが持っておられる権威そのものを示された、その同じ場である。

そこでイエスをご自分の方からこのたとえをもって、ご自分がいかなる権威に立つ者であるか、すなわち神の権威ということについて語られた。



#### (2) 農夫たちに託されたぶどう園

また、イエスは人々に対してこのようなたとえを話し始められた。「ある人がぶどう園を造り、それを農夫たちに貸して、長い旅に出た。

ここに「ある人」がいる、大変有力な人である。ぶどう園を造った。ぶどう園を造るには苦勞がある。その土地を、まず石を取り除いて良い地になければならない。そして周りに垣根を巡らし、その中にぶどうを収穫した時に汁を搾る酒ぶねを造らなければならない。

ぶどう園を貸した人とは「神」のことである(イザヤ5:1-7を参照)。「ぶどう園」は、神の特別な民としてこの世界史の中から選び出された「イスラエル民族」である。

「農夫たち」は「イスラエルを治める者」として選ばれた王、あるいはイエスの時代においては祭司長や律法学者、長老たち、ユダヤの最高議会を構成する議員たちと考えることができる。

《長い旅に出た》これはイスラエルの歴史を見るとわかるように、神はまずイスラエル民族と、律法によって特別な民としての契約を結ばれる。

イスラエル人が、モーセによってエジプトの圧政のもとから脱出して、独立した民となっていく。そして神が約束された地、カナンすなわち今のパレスチナに向かって旅していく途中、シナイ山において神はモーセに律法を与えた。

これによって、イスラエル民族が「神の特別な民」であるという具体的な約束をされた。その後、イスラエル民族は神によって導かれ、治められていく民族とされた。やがて神に代わって王が立てられ、祭司が立てられ、神の民イスラエルは、農夫たちすなわち王、あるいは祭司、指導者たちに託された。

#### (3) イスラエルに遣わされた預言者

収穫の時になったので、彼は農夫たちのところに一人のしもべを遣わした。ぶどう園の収穫の一部を納めさせるためであった。ところが農夫たちは、そのしもべを打ちたたき、何も持たせないで帰らせた。

主人のもとから遣わされたしもべは、預言者である。預言者は時々現れて、イスラエル民族を神との正しい関係に戻す。神の御心を民に示し、民をして神に従わせようとする。

モーセもその一人であった。またサムエル、ダビデ王もまた預言者と言われる者であった。イザヤ、エレミヤ、アモス、ミカ、ホセア等がいる。そして旧約最後の預言者バプテスマのヨハネが登場した。そうした預言者を見ていく時に、1人としてその遣わされたぶどう園の農夫たちから迫害されなかった者はいない。

#### (4) 預言者を迫害する民

そこで別のしもべを遣わしたが、彼らはそのしもべも打ちたたき、辱めたうえで、何も持たせないで帰らせた。彼はさらに三人目のしもべを遣わしたが、彼らはこのしもべにも傷を負わせて追い出した。

農夫たちは最初のうちは、このぶどう園は主人から貸し与えられたものだ、自分たちが何にも勞せずして与えられたものだ、という感謝はあったかもしれない。

しかし主人の旅が長い期間が過ぎていった時に、いつしか感謝の心は薄れてしまい、ぶどう園が自分のもののように思われてきた。これを他の者に取られたくない。自分が働いて得たぶどうをどこまでも自分のものとしていきたい。

こんなに一生懸命働いたのだ。今日に至るまでこんなに汗水流し、知恵を絞って働いてこれまでにしてきたのだ。だから、これは私のものだ、私のぶどう園なのだ、というふうに農夫たちは思った。

預言者たちは、その事の起こりを説き、神あつてのイスラエルである、主人あつてのぶどう園である。だからこれに対して正しい関係を持つていくのは当然ではないか。それがイスラエル民族の正しいあり方はそこにあるのだ。それを説くが、農夫たちは聞かない。

かえってこれを邪魔者とし、自障りとして、自分の前から片付けてしまおう。それが、イスラエルの民が、特にその指導者たちが神の預言者たちに対して振る舞ってきた態度であった。マルコ福音書に、その事が表現されている。



ところが、彼らはそのしもべを捕らえて打ちたたき、何も持たせないで送り返した。そこで、主人は再び別のしもべを遣わしたが、農夫たちはその頭を殴り、辱めた。また別のしもべを遣わしたが、これを殺してしまった。さらに、多くのしもべを遣わしたが、打ちたたいたり、殺したりした。(マルコ12:3-5)

何度も自分のしもべに侮辱を加えられ、あるいは殺される。しかし、主人はどこまでも寛容に、何としてでもこのぶどう園の農夫たちと和解し、明るい営みをなしていきたい、その願いから何度もしもべを送り続けた。これが旧約預言者の歴史である。

しかし、しもべでは事態が進展しない。もう使いではだめだ、預言者ではだめだ。そこで主人はどうしたのか。

(5) 私の愛する息子を送ろう

ぶどう園の主人は言った。『どうでしょうか。そうだ、私の愛する息子を送ろう。この子なら、きっと敬ってくれるだろう。』

どこまでも寛容であり、どこまでもこの農夫たちと平和な関係を持ちたいと願う主人が最後に思いついたことは、愛してやまない、片時も自分のもとから離れたことのない愛する私のひとり息子を遣わそう。

これなら自分と同じことだから、いくらわけのわからない農夫もわかってくれるだろう、自分と同じように敬ってくれるだろう、そういうふうと考えて、ひとり子を農夫の所に遣わしたというわけである。

ところが、農夫たちはその息子を見ると、互いに議論して『あれは跡取りだ。あれを殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる』と言った。そして、彼をぶどう園の外に放り出して、殺してしまった。

ここに、イエスが例えられたこのたとえの(深遠な意味)がある。これを見落としてはならない。主人のひとり息子は、永遠の初めから神と共におられた神のひとり子、マリアの胎を通して人として現れたイエス・キリストである。

神がご自身を現すように、神のひとり子が人のかたちをとって現れた。神の御心が具体的に啓示された。手で触れる姿において、目ではっきり見られる姿において、耳で聞く具体的な事実において、神の御心が人間に現された。もう神の言葉を取り次ぐ(しもべ)、預言者ではだめだ。神様じかに、すなわち神のひとり子の現れ、それがイエス・キリストである。

しかし、ぶどう園の農夫たちはこれをどう扱ったか。イエスに十字架を負わせてあのエルサレムの郊外のゴルゴタの丘に引き出し、すなわちぶどう園の外に放り出して、イエスを十字架にかけて殺してしまった。

(6) 私たちへの適用

こうなったら、ぶどう園の主人は彼らをどうするでしょうか。

神は忍耐と慈愛を持って、反逆する人間に時間の猶予を与え、悔い改めて神に立ち返らせようとされる。イエスの復活後、聖霊が臨んで、この喜ばしい福音はまずユダヤ人に伝えられ、信じて救われた者たちが起こされていった。

しかしユダヤ人の大勢はイエスを拒否した。そのため、救いの福音は異邦人の世界に伝えられていくことになり、紀元70年にエルサレムはローマ軍によって崩壊し尽くされ、ユダヤ人は国を失った。

これは何もイスラエル人だけの問題ではない。このたとえで主人が忍耐を持って農夫たちに幾度もチャンスを与え続けたように、神はすべての人が神に立ち返ることを待っておられる。

農夫たちがぶどう園を借りていたように、私たちは人生という生活と働きの場を、かなりの自由を与えられながらも、真の所有者である神様から借りている。自分の生活にしても、自分の才能にしても、自分の時間にしても、すべては神からの預かり物にすぎない。それを、ウツカリすると、すべては自分のものだと思い込んでしまふところがある。

あの農夫たちの所へ、ぶどう園の主人がしもべを送って、収穫の自分の分を受け取ろうとしたのに、そのしもべを袋だたきにして送り返したように、私たちもすべてのものが(神からの預かり物)だという感覚がなくなると、すべてを自分のために使うことになりかねない。

自分が自分の人生の所有者、主人公であると考えているとしたら、この農夫たちと同じ罪を犯していることになる。真の所有者である神様に(感謝の捧げ物)をする人生を送らせていただきたい。

(7) 徹底的な滅び

主人はやって来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。

神の寛容を踏みにじって、神を侮り、反抗するならば、結ぶものは何か。滅びでしかない。ぶどう園の主人はこれを徹底的に滅ぼして、ぶどう園を他の者に与えるしかない。このイエスのたとえによる預言はその通り実現した。

エルサレム滅亡の預言である。イエスがこのように語られた時より40年の時が過ぎて、なおもぶどう園の農夫たちは神の寛容を踏みにじって、悔い改めることをしなかった。

なおもぶどう園を私物化し、勝手な信仰に立って、自分たちの神を信じている、信仰していると自分で自分に思い込

ませ、また人々にも思い込ませ、神に逆らう道を歩み続けた。その結果どうなったのか。

神の審判は厳然としてこの上に現れた。ぶどう園の主人の審判は、この農夫たちの上を下った。紀元70年、ローマの大將ティトウスは、大軍を率いてエルサレムを包囲した。その戦争は約3年間続いた。そしてついに何重にも包囲されて兵糧攻めにあい、城内にあるユダヤ人たちはほとんど全滅し、残る者は皆奴隷として率いられて行った。

人間の歴史の中にあまり見るのできない残忍さにおいて、悲惨さにおいて、エルサレムは一拳に廃墟と化した。有名なユダヤ戦争の出来事である。

結局神の選民、そしてその指導者であった農夫たちは皆滅ぼされて、ぶどう園は他の人々に与えられた。すなわち異邦人に与えられることになった。真のアブラハムの信仰の子孫としてキリストを信じ、受け入れる者たち、すなわち教会がこのぶどう園となり、キリストを信じる者たちが農夫たちとなった。今やそのぶどう園は、全世界に広げられつつある。これは歴史上に起こった事実である。

(8) 要の石

これを聞いた人たちは、「そんなことが起こってはなりません」と言った。

聞いていた祭司長や律法学者、長老たちは、聞いているうちに何となく自分のことに関わりがあるように思えてきた。だからそんなことが起こってはなりませんと、否定した。そこで、《イエスは彼らを見つめて言われた》どこまでも祭司長、律法学者、長老たち、すなわち農夫たちに向かって、イエスの言葉は深く食い込んでいった。

それは敵に対する激しい見つけめではない。何としても分からせたい。敵として立つ場から離れさせたい。主人に対立する農夫ではなく、本当に主人と手を握り、ぶどう園を平和な安泰の場としていく、そういう農夫になってもらいたい。そういう願いを持ってのイエスの相手への(深い見つけめ)である。

では、『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった』と書いてあるのは、どういうことなのでしょう。

祭司長や律法学者、長老たちは聖書をもって民を指導する立場にある者たちである。聖書の言葉は皆よく知っている。詩篇118篇22節の言葉である。相手は聖書の専門家である。本当にこの言葉が分かったら、今イエスが語られたこのたとえによって、自分の誤りを認めることができるはずである。

《家を建てる者たち》これはぶどう園の農夫たちのこと、ぶどう園を造っていく者たちである。

《家を建てる者たちが捨てた石》こんな石は必要ない、むしろ家を建てるのに邪魔な石だと言って、どこかへ蹴飛ばしてしまう。しかし、賢い者から見れば、その邪魔に見える、無駄に見える石こそが、この家にとって家を建てるのにどうしてもなくてはならない「要の石」なのである。

この言葉が分かるか、とイエスは語られた。イエスこそ、あるいはぶどう園に最後に遣わされて来た、主人を代表して遣わされて来た者である。

神の御子イエス・キリストを土台として受け入れてこそ、永遠の家が建つ。しかし今、家を建てる者たちはこれを邪魔として殺そうとしている。この言葉が本当に分かったら、今捨てようとしている石、それこそが自分たちの救いのために必要な石だということが分かったら、彼らは救われることができ、神の恐るべき審判から免れることができる。



(9) 救いの石につまずく者

だれでもこの石の上に落ちれば、粉々に砕かれ、またこの石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。

キリストの2回にわたる来臨のことが、この18節に示されている。主の初臨のことが、地上にある石として描かれている。人々は主がへりくだって低くなられたことにつまずき、このお方を拒んだことによって粉々に《砕け》た。

この節の後半では、石は天から落ちて来るもの(再臨)として描かれている。そして、不信者たちを《粉みじん》に飛び散らすのである。